

<フィンランド旅行で感じたこと>

橋本 弘美

1. 動機

ノルウェーのオスロに日本語教師として赴任したのは、2000年の8月。当時、しばらくこの街に馴染めず、溶け込めないな、という「引きの感情」を持っていた。

街の雰囲気、地下鉄のかたち、店のサービス、わからない言葉 etc、何をしても、私はどうも「よそ者」としてここに存在しているようである。もちろんノルウェー人ではないから「よそ者」であることに変わりはないのだが、それでも「これから自分の住む場所」として期待してやってきた私は、オスロの街の冷たさに寂しさを感じていた。

その年のオスロは、50年ぶりの降雨量を記録するほど、雨の日が約3ヶ月以上も続いた。街の雰囲気だけではなく、外界の気温からも冷たくされたように感じた。その暗く重くジメジメした気候は、私の心に輪をかけて重く押し掛かり、いつも肩から背中にかけてダルさがあった。「太陽が見たい」「光がほしい」。日光がこんなに人間の精神状態に影響するのか、と驚いたほどである。いままで何気なく浴びてきた太陽の日差し。その大切さをしみじみ思って、暗い寒い「冷たい」オスロをますます犬猿していった。

そんな出来事が続いたからか、私はよく以前暮らしていたフィンランドでの生活を思い出し、ことあるごとに比べていた。

フィンランドのロバニエミという北極圏の玄関と言われている町に私は一年間暮らしていた。ここでの生活は都会的な便利さは無いものの、自然の美しさに心を奪われる毎日だった。家を出るとすぐ、「ムーミン」(フィンランドの物語に出てくる妖精)が木の後ろからひょっこり顔を出しそんな神秘的な森が続き、小道には紫や赤のブルーベリーや木苺がたくさんなっている。それを「あ、ここにも!」「こっちにも!」と、綺麗な色の小さい果実を、私は毎朝宝石を見つけるようにして、大学まで向かった。大学に着いて鏡を見ると、私の口の周りはブルーベリーでいつも紫だった。抜けるような高い青空、深い森の緑、そして赤や紫の果実。私はフィンランドのことを思い出すと、決まって鮮やかな「色」が蘇るのである。そんな色彩という点をとっても、雨続きで暗いオス

口は私にとってつまらない「灰色」に見えていた。

そんな風に、ノルウェーにいながらにしても、私は心の中で、「フィンランド」をどこか心の拠りどころとしているところがあった。「あの町に帰れば、自分を受け入れてくれるはずだ」。当時そのように考えていたように思う。自分に「ホームカントリー」のような存在があるとすれば、それは「ノルウェー」ではなく「フィンランド」だと感じていた。

「オスロから離れ、懐かしい町に遊びに行こう！！」私は、翌年のイースター休みにフィンランド旅行を計画した。カレンダーに印をつけ、楽しみにその日を待っていた。

数ヶ月ぶりのフィンランド、ロバニエミ。そこは私がいた時の姿であたたかく迎えてくれた。あの壁のキズあとも、このドアの重さも、階段のきしみ具合も全部覚えている。体がちゃんと反応していた。そういったことにすら嬉しさを感じていた。

だが、非常に不思議なことだが、懐かしのロバニエミにいながら、「私はもうここの人じゃないんだ。ここに住んでいないんだ。」という感覚も同時に生まれていた。それは「寂しさ」という気持ちとはまた違う。「切なさ」に似たものだろうか。でもそれでいて「突き放された」感じではなく、むしろこの町から、「もうここは卒業しなくちゃね、あなたには新しい場所があるでしょ」と言われたような感じだったのだ。受け入れなくちゃいけないと思った。今の現実を。今の生活を。今の私のいる場所を。そして、「ノルウェー」に対して持っていたトゲトゲした気持ちが、少しずつ薄らいでいくのを感じた。「そうか、今、私のいる場所はノルウェーのオスロなんだ。」とやっと受け入れられそうだった。

これを私は「町の声」だと思っていたが、自分自身で作り出した「私の声」だったのかもしれない。

私は子供のころから、父親の仕事の関係で、色々な町に暮らした。小学校 3 回、中学校も 2 回変わり、その度に「転校生」として新しい場所で生活をはじめなくてはならなかった。その土地に不慣れで友人と呼べる人もいない最初の頃、いつも思うのは、慣れ親しんだ前の町や、前の学校での友だちのことだった。そして思い出して、「帰りたい・・・」とよくメソメソ泣いていた。でも時

間が経つと、いつの間にか新しい場所にも慣れていき、昔のことを思い出す時間もだんだん少なくなっているのである。

今回私がずっと「ノルウェー」に対して感じていたのは、自分の子供の頃から持っていた「転校生」の記憶だったのかもしれない、と思った。私はもうあの幼い頃の自分から、大人になっていると思っていたのだが、心の記憶が、「転校生」の不安を覚えていたのだろう。オスロという街が私を受け入れてくれない、と思っていたが、実はそうではなく、ただ新しい街に暮らす「私の」不安だったのではないか。それを私は「オスロのせい」にしていた。

フィンランドの旅行は、私にそんなことを気付かせてくれた。ノルウェーからフィンランド行きの飛行機に乗った時の心境と、フィンランドからノルウェーに帰る時の、「オスロに対して」私の心境は確実に変化していた。

だから私はこう書きたい。

私にとってこのフィンランド旅行は、ノルウェー・オスロを好きになるきっかけをくれた旅だった、と。

2 . ディスカッション

実は上の動機と仮説は、ディスカッションを通して書き直したものだ。はじめ私は、タイトルは「オスロと私」とし、仮説も『「私」は今ここにいる、ということを知ってくれた場所である』と書いていた。しかし、グループでディスカッションをしながら相手の人たちに「その仮説はよくわからない」「私はここにいる、っていうのは当たり前のことではないか」等意見をもらい、自分自身も仮説のあいまいさに気が付いた。

ある人の「どうしてオスロを、今いる場所だと思えたの？」という質問に対して、フィンランドに旅行に行った経験を話したら、「じゃあ、タイトルは『フィンランド旅行と私』にしたほうがいいんじゃない？」という返事をもらった。それを聞いて、ああ、なるほど！と思った。

その人は更に、「そのフィンランド旅行で何を感じたの？」と聞いてくれた。そして私が感じたことが、上に書いた動機なのである。

だから、はじめのディスカッションと内容が異なってしまうが、今はそれすらも、このワークショップの面白さだと思っている。

まだ「オスロと私」という題で話していたとき、パートナーの方は、私の話を聞いて、

「フィンランドに対しては“片思い”のように思っていたのかもしれないね。そして、ノルウェーに関しては、別に向こうがあなたのこと嫌っているわけじゃないのに、あなたのほうがそっぽを向いていた感じだね。」

とコメントをくれた。そう、私は、何か「フィンランド」と「ノルウェー」を人のように好き、嫌いという感情で見えていたかもしれない、と思った。そしてそれがいかにナンセンスなものであったかしばらく考えた。

「フィンランドのことも、今はすごくいい思い出になっているのかもしれないけれど、はじめはきっと色んなことがあったんじゃないのかな？」

そう、きっと辛かったことは忘れているのだろう。そしていい部分だけが、上手に思い出に変わっているのかもしれない。自分にとって都合のいい部分を覚えているのだろう。

「でもそれは悪いことじゃなく、自然なことなんだよね」

話し合いの中から、結局「国」という単位で計ることは出来ないのではないかと、ということになった。例えば、日本の中でも「北海道」と「東京」でも違うということ。つまり「国」という枠組みではなく、その人のいる「場所」や「環境」の問題ではないか、ということに話が発展していった。

そして、新しい場所に行くことは、今までの経験を真っ白にする必要などない、ということをお話した。今までのバックグラウンドもしっかり持って、そしてその上に新しい経験を積み重ねていければいい、ということである。

私は、以前から、頭の中を「ノルウェーモード」に切り替えなくてはならない、と思っており、それが受け入れられず、辛かった、と感じていた。しかし、はじめから「モード」など切り替える必要などないのだ、というところに行き着いた。今までの出来事は経験として持ちつつ、新しいものをまた自分の経験に織り込んでいく。それは過去の自分を忘れることでも、否定することでもない、ということに気付けたディスカッションであった。

3 . 結論

このレポートの中で私は「ノルウェー」「フィンランド」と国名で書いてきたが、本当は「自分の存在していた場所」のことを書きたかったので、そこに国名を当てはめ、ひとくくりにするのはおかしいかもしれないな、と反省した。そういう意味で「ことば」は使い方が難しいと改めて思った。

このレポートは、ベルリンのワークショップが終わってから仕上げたものなので、私の中では先にディスカッションが行われ、動機はどんどん新しく変わってってしまう結果になった。今考えている動機を持っていったら、どんなディスカッションになっただろう、と思う。

これを書くまで、宿題やその下書きの紙などがたくさん出てきたが、それらを見ながら、「思考は常に動いているのだなあ・・・」ということも同時に考えた。はじめに書いたことから随分話が変わってきている。今回は3日間という限られた時間だったのにもかかわらず、こんなに色々なことを考えるきっかけになったが、細川先生の実際の総合授業では、半年かけてじっくり考えながらレポートを書くので、もっと深く、もっと広く考えが湧いてくるのだろう、ということが想像できる。

このレポートを書くにあたり、ノルウェーのことを振り返りながら、いまここで生活している一日一日を大事に過ごそう、と改めて感じた。私の今の“舞台”は、ここなのだ、ということを感じたら、目に映るものも何だか愛しくなってきた。ここオスロは、2002年における私の人生の時間を共有している、大切な場所なのだから・・・！